

2016年
11月14日
月曜日

韓 燕麗 准教授（映画史）

映画『真夜中の五分钟前』から考える日中関係の現在

日中関係が悪化しているなか、近年の中国観光客の増加、微信／WeChatなどインターネット情報の発達により、現代日本社会に対する中国一般民衆の理解は、数年前と比べむしろ深まっており、しかも非常に良いイメージ（マナーの良さ、交通の便しさ、サービスのレベルの高さなど）が中国民衆の間で構築されつつあると言えよう。しかし同時に、逆に日本人に今現在の中国から文化的魅力を感じるかと聞くと、およそ大多数の方から肯定の答えが出ないというのも事実であろう。上記のような現状のなかで、われわれは日中両国間ないし東アジアの文化交流に対してどのような未来図が描けるのだろうか。この設問を答えてみる前に、昨年末に日本で公開された一本の映画を取り上げて考えてみたい。

映画『真夜中の五分钟前』の原作は本多孝好、監督は行定勲で、オリジナルの物語は完全に日本発のものであった。しかし制作資金は完全に中国側から出され、三人の主要人物はそれぞれ日本、北京そして台湾出身の俳優によって演じられ、撮影クルームも中国人スタッフ60名、日本人スタッフ20名という混成チームで、いわば文化的越境を実践した映画作品であった。上海を舞台にしたこの映画の物語を追っていくと、そこに展開される物語の都市空間ないし登場人物の感情表現のいずれも文化的な色合いが希薄であることがわかる。つまり舞台は上海であれ東京であれ、あるいは中国であれ日本であれ、もはや重要ではなく、とある現代的な大会におけるオシャレな若者たちの恋愛物語として、顕著な「中国的」または「日本的」要素が欠如

しているのである。

映画のパンフレットから、「このように国境を越えて制作していく映画作りが、アジア映画プロジェクトの新たなスタンダードとなるかもしれない」という記述があったが、「新たなスタンダード」というのは映画製作のスタイルのみならず、じつは今後日中間の若者文化の重要なキーワードにもなるのではないか。映画の記者会見で、主演俳優たちは互いに日本語と中国語を教えあう興味深い場面があった。「今日は格好いいね」「今日は可愛いね」といったフレーズの日本語と中国語を俳優たちは互いの言葉を覚え、そして褒め合った。もし次世代にとって共有できる文化的「新たなスタンダード」があるとすれば、このような「格好良い／悪い、可愛い／可愛くない」に代表される若者文化になるのだろ

う。近代以降のアジア諸国の相互認識は、長い間、西洋というフィルムを通じたものであった。アジアにおける近代化とはほとんどすなわち「西洋化」として理解され、国家や民族の優劣は長い間、発展の時間差つまり西洋の近代化の程度によって語られてきた。しかし今日、われわれが文化的視点から今後あるべき日中関係の未来図をあらためて考える際、新たなアジアの文化的「規範」は誰によって、そしてどのようなものを創り出すべきなのか、という問題に直面する。地道な民間レベルの文化交流によって共通する文化的アイデンティティを醸し出し、そこから政治・経済の面では冷え切った水のような日中関係に少しずつ亀裂を入れることを、当面、辛抱強く継続すべきであろう。